

日本手話における空間の文法化

小藪江 聡*・木村 晴美**・市田 泰弘**

(東京家政大学*・国立身体障害者リハビリテーションセンター学院**)

はじめに

手話言語に限らず、人間の言語においては、抽象的概念が空間的情報に比喩的に写像される (metaphorical mapping)。手話言語においては、さらに、空間的情報が手話空間 (signing space) に図像的に写像される (iconic mapping)。このような二重写像 (double mapping) は手話言語に特有な現象である (Taub, 2001)。特に手話空間は、その場にはない指示物を空間内に位置づけることで、動詞の一致とも関わって、前方照応的機能を果たすことから、代名詞的な役割を担っているとみなされている (Lillo-Martin, 1986 ほか)。しかしながら、利用可能な手話空間内の位置が無限であること、音韻的実体がないこと、語彙項目に登録できるような名詞・代名詞としての性質をもたないことを指摘して、手話の空間利用は“言語的”な現象ではないとみなす研究者もいる (Liddell, 2000 ほか)。一方で、神経言語学的な研究成果からは、位相的 (topographic) な空間利用とは区別される、文法的な空間利用の存在が示唆されている (Poizner et al., 1987 ほか)。

本論では、日本手話には、有限の位置からなる“文法的”な空間利用が存在することを示す。

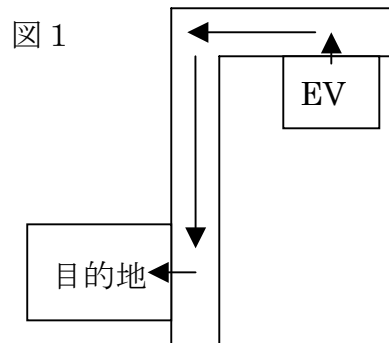
日本手話の文法的空間

手話空間内には、文法的な役割を果たす 8 つの位置がある。それらの位置は、指差しの方向や特定の手話単語の位置、一致動詞の運動の起点と終点などと結合することによって、代名詞的接辞として機能する。8 つの位置は、すべて 3 人称であり、「物理的距離」「心理的近接性」「不均衡性」という 3 つの意味素性の対立によって説明できる。また、その空間は、等身大的視界をもつ観察者空間というフォーマットにもとづいている。

空間フォーマットと視界

手話空間のフォーマットには、図式的 (diagrammatic) 空間と観察者 (viewer) 空間がある。図式的空間では、鳥の目から見下ろすようにして空間上の配置などを描写する。それに対して、観察者空間では、その状況の中にいる人物の目を通して描写する。視界 (パースペクティブ) という点に着目すれば、前者は、“survey” と呼ばれる俯瞰的な視界であり、後者は“route” と呼ばれる等身大的な視界である (Taylor & Tversky, 1992; 1996, Emmorey & Falgier, 1999)。この二者の違いは、図 1 のエレベーターから目的地までの道順を例にとれば、鳥の視点から地図を描くように説明す

るか、エレベーターから降りた人物（観察者）の視点から進む方向を示し、方向転換後の視点に切り替えた後、しばらく進んだ先の右側を指すようにするかの違いである。この視点の切り替えは、ロールシフト（新しい用語としては referential shift）と関係が深い。また、切り替えにあたっては、NMS による明示的な標識が現れる。位相的空間利用において、母語話者は観察者空間を多用するが、文法的空間利用においても、この観察者空間が用いられるのである。

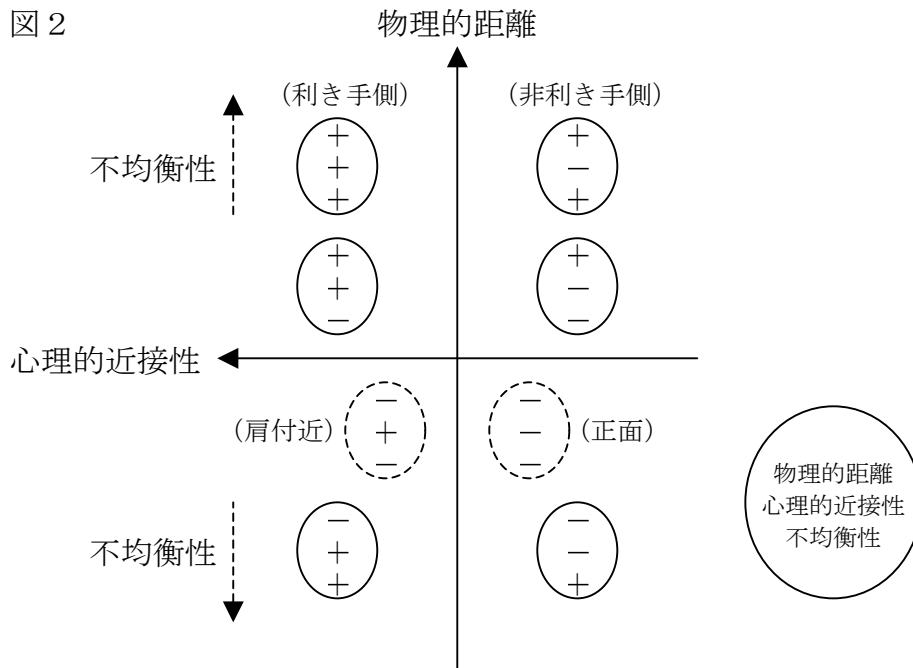


文法的空間位置と比喩的写像

抽象的概念と具体的空間との間の比喩的写像は、手話に限らず、あらゆる人間の言語に共通するものである。Taub (2001) はその例として、「親しさは近さ (“intimacy is proximity”）」「権力は上 (“powerful is up”）」「未来は前方 (“the future is ahead”）」「話題は場所 (“topics is locations”）」などの比喩をあげている。これらのうち、「未来は前方」のような時間に関する空間的写像は、手話に“タイムライン”という時間表現のための特別な空間フォーマットを生み出している (Engberg-Pedersen, 1993 など)。また、「話題は場所」といった比喩を利用した抽象的指示物の対比などの表現には、図式的フォーマットが利用される。

「親しさは近さ」とは、つまり「心理的近接性」のことであり、「権力は上」とは「不均衡性」である。それらに、「操作可能」（あるいは「話者との同一視）」という観点から「物理的距離」を加えた 3 つの意味素性（3 つの素性の組み合わせは、 $2^3=8$ である）を観察者フォーマット上に写像したのが、文法的空間である。

手話空間を 3 つの素性によって分けると、話者の身体から遠いか近いかで「物理的距離」が、話者の利き手側にあるかどうかで「心理的近接性」が、話者よりも上や下にあるかどうかで「不均衡性」が表される (図 2)。左右の空間には、上中下 3 つずつの位置があり、残る二つは話者の正面やや下と、利き手側の肩の付近（指差しの場合は、肩越しの後方）にある (図 2 では点線で囲んである)。正面の空間は、無標の中立的な空間であり、記述にあたっては、この位置がすべての素性についてマイナスの値をとることが望ましい。この位置は、操作可能なほどに物理的に近く、話者と向き合う対象であるから心理的には遠い。そこで、物理的距離は「遠さ」を、心理的近接性は「近さ」を、それぞれ有標とみなすのが妥当である。そうすれば、残る利き手の肩付近の位置（話者と同一視される）は、心理的近接性のみプラスの値をとることになり、これも適切に記述される。



空間利用の記述

具体的な例文で、これらの空間がどのように用いられるか見てみよう。

※便宜的に、利き手が右手であると想定し、右上から 3-5、右肩が 6、左上から 7-9、正面を 0 とする

- (1) 私 妹 東京 いる-pt3 トラブル らしい-pt3 私 東京 1-訪ねる-0 妹 1-会う-0
 0-話す-1 聞く 驚く 借金 らしい-pt0 (略) 今 妹 家族 一緒 生活 中-pt5
 「東京にいる妹がトラブルを抱えているということで、上京して話を聞くと、借金
 トラブルだという。(実家に連れ帰り) いまでは家族と一緒に暮らしている」

「東京にいる妹」は「右上」：操作不能という程度にとどまらない遠さは、「+物理的距離、+不均衡」で表す。ここでは、妹は心理的には近いので、右上になる。「東京にいる」のと「トラブルに見舞われている」のが同一人物であることが位置と結合した指差しの前方照応的機能によって示されている。

「私と会った妹」は「正面」：ここでは、「東京」と「妹」が同一の位置をもち、さらに「私に話をする」のと「借金トラブルを抱えている」のが妹であることが、指差しの前方照応的機能によって示されている。妹が正面の位置をとるのは、事前にトラブルを抱えているという情報があって、話を聞くという目的で訪ねており、その「話を聞く」という行為自体に焦点があたっているためだと考えられる。もしも事前に情報がなく、妹の事態を上京してから偶然知ったという場合には、次のようになる。

- (2) 私 妹 東京 いる-pt3 私 東京-pt3 1-訪ねる-3 後 妹 1-会う-8 8-話す-1 …
 借金 困る トラブル-pt8 (略)
 「東京にいる妹のもとを訪ねると、なんと借金トラブルを抱えているという」

「東京を訪ねる」の「東京」は「右上」、「その後会った妹」は「左中」：(2)の「訪

ねる」という動詞は「東京にいる妹」と一致している。(1)では「妹と会って話すために東京に行った」のだが、(2)では「妹が東京にいるから東京に行った」というニュアンスになっている。そして、「後」というテンス標識をはさんで、「妹に会う」では妹は左中に置かれている。そして、「借金トラブルを抱えている」のが、その妹であることが指差しの前方照応的機能によって示される。左中の位置は、〈会う〉という動詞の目的語の、無標の位置（操作できない程度に遠く、心理的にも遠い）である。

「家族といっしょに暮らしている妹」は「左下」:〈今〉というテンス標識をはさんで、妹は左下（あるいは右下）の位置に置かれている。現在の話者と妹の権力関係から「-物理的距離、+不均衡性」をとり、心理的な距離感によって左右が決定される。

分析

この例文の記述からいえることは、指示物は、談話中、同一の位置に維持されるわけではなく、時間的空間的な場面の転換に伴って、位置の再設定が行われるということである（観察者空間では、位相的空間利用においても視点の切り替えが起こることを思い出されたい）。しかも、場面の転換には標識が伴っている。(1)の〈訪ねる〉に伴う「移動の NMS」や、〈後〉〈今〉など時間に関する語彙的な標識がそれである。そして位置は、その場面においてもっとも焦点のあたっている一致動詞の無標の位置、無変化動詞の場合は、話者と指示物の関係によって決まるようだ。別の例をあげよう。

(3) 私 昔 学生 時 友達 私 4-いじめる-1 いる-pt4

でも 今 死ぬ 生きる どちら わからない-pt8

「学生時代に私をよくいじめた友人がいたのですが、今は生きていますかどうかさえ知りません」

〈今〉をはさんで異なる時間的空間的場面をもつ二つの文の間で、「友人」の位置は、前方照応的機能を果たすようには保持されず、「私をいじめる」という一致動詞の動作主の無標の位置である「右中」と、「生きていますかどうか分からない」対象としての友人と話者の関係（話者にとって不確実な存在であること）による「左中」という二つの異なる位置をとる。このような例文を収集し分析することで、文法的空間利用における位置選択の原則を明らかにすることができるだろう。

参考文献

- Engberg-Pedersen, E. (1993). *Space and Danish Sign Language: The semantics and morpho-syntax of the use of space in a visual language*. Hamburg, Germany: Signum-Verlag.
- Liddell, S. (2000). Indicating verbs and pronouns: Pointing away from agreement. In K. Emmorey & H. Lane (Eds.), *The signs of language revisited: An anthology to honor Ursula Bellugi and Edward Klima* (pp. 303-329). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lillo-Martin, D. (1986). Two kinds of null arguments in American Sign Language. *Natural Language and Linguistic Theory*, 4, 415-444.
- Taub, S. (2001). *Language from the body: Iconicity and metaphor in American Sign Language*. Cambridge, England: Cambridge University Press.